



新規就農物語

③安平、有機農園 HUMAN NATURE (ヒューマンネイチャー) <前編> ～ポスト資本主義時代の遺伝子たち～



～MAN IN THE MIRROR（鏡の中の男）～

2013年の中村さん、2016年の新戸部さんの独立に続き、2019年に独立したのが土屋真吾さん。2019年といえばつい昨年の話。しかも2016年の9月まで会社員で、翌4月に研修入りしたのですからまさにスピード就農です。それでも、1年目から安定して野菜が出荷されたため、有機農協職員の間ではこれはすごい！と話題になっていました。

土屋さんは千葉県生まれ。高校、大学と関東で過ごし、就職氷河期世代でありながら商社系の会社へと進むことができました。1年目は名古屋、その後東京に戻り7年、そして札幌へと異動に。転勤こそありましたが、好きなジャンルの技術職の畑で活躍することができ、私生活でも東京時代に結婚、その後二人の子どもが授かり順風な日々を送っていました。それが2008年リーマンショック以降、会社の業績が下降し始め、生活が一変します。会社からの要望、要求はどんどん大きくなっています。それでも土屋さんは会社のため、もちろん生活のためにと、献身します。男として職を失うわけにはいかないという自分の中での不文律もありました。早朝に出社し深夜に帰宅してまた早朝出社、そんな日々が続きました。周りの声に沿った役割を演じ、自己を押

し殺していくうちに、見る者の世界から、見られる者的世界へ、それはまるで鏡の中へと、自分が消滅していくを感じていました。

そんな中、土屋さんの癒しのひとときとなっていたのは、札幌の社宅の一角に僅かに残されていたスペースでの家庭菜園です。最初は有機とは何かもわからずいましたが、家族で食べるなら有機栽培だろうと、肥料も自分なりに作り始めました。土屋さんは4歳の頃からバイオリンを習い始め、演奏やオーケストラ鑑賞が趣味。ベートーベンやグリーグ、チャイコフスキーらの曲を聴きながらの農作業は当時の心労をだいぶリフレッシュしてくれたそうです。札幌で家庭菜園を楽しむ音楽仲間から固定種（農家や地域が代々受け継いできた品種）についても教わり、そこから人間の都合で変えてきたものの不自然さや、食べものを育てる自然の「土」の大切さを痛感しました。また、家族の美味しいという言葉が喜びとなり、有機野菜へのめり込んでいきました。

そんなある日。会社の中堅社員が集められた会議の中で、退社勧告がなされます。絶望、失望、恐怖、そういうものを超えた空虚。土屋さんは、完全に鏡の世界に落ち込んでしまいました。鏡の中から、土屋さんは奥様へ声を絞り出しま

就農研修の受入をする安平、無何有の郷（むかうのさと）農園、小路組合長のもとへ、2011年、2014年、2017年と3人の青年がその門をたたき、それぞれがその後、安平で新規就農を果たしました。時代から何かを感じ取り、これまでとは異なる道を歩み始めたその一歩には、人間が次の時代を生き抜くヒントが隠れている気がします。新規就農者のストーリーを、それぞれの野菜へのこだわりと合わせてシリーズで紹介します。

◀ 研修半年後に圃場（と家）を決断。おかげで独立1年目から有機JASで出荷が可能に

▼ 露地での定植に間に合わなかったサツマイモの苗。なかなか思うようにいきません



▼ 悠れ込んだ固定種栽培も一部続けています



▼ 出荷中のホウレンソウ。昨夏は虫で全滅とのことですが今年は！？



す「会社を辞めようと思う。」すると土屋さんの苦悩を傍で見ていた奥様は「農業の道もあるじゃない？」こう言って鏡の中から土屋さんの手を引き上げたのです。

（つづく）